

令和 4 年 6 月 2 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00073

研究課題名(和文) 銀雀山漢墓竹簡の訳注および思想研究

研究課題名(英文) The Translation, Annotation and Ideological research of The Han Dynasty Bamboo Slips Excavated from Yinque Mountain

研究代表者

石井 真美子 (ISHII, Mamiko)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：40533154

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：1972年に中国山東省銀雀山前漢墓より出土した竹簡本のうち、政治および軍事について述べた佚書五十篇について、2014年より訓読・注釈・現代語訳を公表してきた。それらをまとめて修正加筆し、また、それらの篇に見られる軍事思想を考察した論文を収めた『銀雀山漢墓竹簡〔貳〕論政論兵之類訳注』を出版した。これらの篇は現代には伝わっていなかったもので、戦国時代から漢代初期にかけての軍事思想の一端を明らかにできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、中国で陸続と発見されている出土文献はこれまで伝えられてこなかった佚書を含み、中国古代の学術・思想の様相を知る上で大変貴重なものである。また、古代の漢字の使われ方や音韻を研究する上でも重要である。日本ではまだ新出出土文献に関してのまとまった研究書が少なく、特に訳注書は少ない。今回の訳注書出版によって、日本にも大きな影響を与えた中国古代の思想を解明し、また古代の書籍の形態を考察する材料を提供できた。

研究成果の概要(英文)：Since 2014, we have published Translation and Annotation of the fifty lost literary works that describe politics and military affairs among The Han Dynasty Bamboo Slips Excavated from Yinque Mountain excavated in Shandong Province, China in 1972. We revised and revised them all together, and published "The Translation and Annotation The Han Dynasty Bamboo Slips Excavated from Yinque Mountain ( ) Articles about politics and military", which contains a paper that considers the military thoughts found in those articles. These texts were not transmitted to the present age, we able to elucidate a part of the military thought from the Warring States period to the early Han dynasty.

研究分野：中国古代思想(主に兵法)の研究

キーワード：出土文献 中国古代思想 中国古代兵法

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

銀雀山漢墓竹簡(以下、銀雀山漢簡)は、1972年に山東省臨沂県(現在の臨沂市)銀雀山一号墓から発掘された、前漢前期(約B.C.135~120頃)の竹簡である。その中には現在に伝わる『孫子兵法』十三篇および『尉繚子』・『六韜』・『晏子春秋』の一部の他、長い間亡佚したとされていた『孫(月+賓)兵法』、また現在には伝わっていない兵法にかかわる佚書の類などが確認された。竹簡はばらばらの断片になっており、これらを整理したものは1975年に一度発表され、1985年に修訂版として大型本『銀雀山漢墓竹簡(壹)』(文物出版社)が出版された(以下、〔壹〕)。同書は『孫子兵法』(佚篇を含む)・『孫(月+賓)(びん)兵法』・『尉繚子』・『晏子』・『六韜』・『守法守令十三篇』の図版及び釈文を掲載したもので、当初三冊本の一冊目として刊行された。一方で同じ1985年に、出土した際に付けられた整理番号(〔壹〕の簡番号とは異なる)順に断簡を含む4942枚すべての竹簡の釈文を羅列した『銀雀山漢簡釈文』(吳九龍著、文物出版社)が出版された(以下『釈文』)。大型本で公開されたもの以外の竹簡本については、判断が可能なものは分類しており、巻末の分類目録に従って釈文の末尾に番号で所属が示してある。図版は無く、活字の釈文のみである。その後大型本の続編は長年出版されず、〔壹〕に掲載された書以外の佚書に関しては、『釈文』の文と分類を手掛かりにその内容を分析する試みが中国内外の研究者によってなされた。相次ぐ新たな出土資料の発見の陰で、日本国内では銀雀山漢簡の佚書を専門にとりあつた研究はほぼ見られなかったが、2010年にいたってようやく『銀雀山漢墓竹簡(貳)』が刊行され(以下〔貳〕)、一部の佚書の図版と釈文が発表され、他の出土文献との関連等から国内でも注目されるようになった。〔貳〕の内容は、現在に伝えられていない佚書で、政治および軍事に関連する「論政論兵之類」、時節ごとの占いや陰陽思想に関する「陰陽時令・占候之類」、「其他」に分類されている。研究代表者の石井と分担者の村田・山内は2014年より〔貳〕の訳注を『学林』(中国芸文研究会)にて掲載開始、2018年度までに八回、合計四十二篇の訳注を発表した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、銀雀山漢墓竹簡に書かれていることを解読、その全体に対してどのような思想が見られるのかを考察し、また銀雀山漢簡に含まれる書籍の構成がどうなっていたかを明らかにすることである。古代の中国では『孫子』に代表されるように、戦争の実際を見据えた現実的・合理的な兵法が貴ばれてきた。しかし、一方で占術や陰陽思想などを取り入れた非合理的な兵法も存在し、近年の出土文献などにより、その実態が明らかになってきている。銀雀山漢簡には合理的な兵法と非合理的な兵法が共存しており、その相互の関係、非合理的な兵法の発展過程および当時の人々の受容、その原因を探る手掛かりになり得るものである。またそれによって、戦国時代末期の多様な思想の一端と人々の精神世界を明らかにすることができる。書籍の構成については、銀雀山漢簡には篇題と思われる語句の上を黒く塗っているものがいくつか見られ、内容的にもつながりがあり、グループに分けることができる。また、中には、「論政論兵之類」の「君臣問答」篇のように、複数の内容が類似する問答から成り、話者が異なる文章を集めたものがあり、銀雀山漢簡に含まれる書の編纂者あるいは保有者の意図が窺えるものがある。中国最古の書籍目録である『漢書』芸文志に記載される以前の書籍の形態と伝播について考察するための一つの材料となるであろう。

## 3. 研究の方法

訳注および整理の具体的な作業としては、まず各篇につき、三名各々が訓読、注、現代語訳を作成し、一ヶ月に一回程度持ち寄って検討する。残簡と〔貳〕のデータについては石井がExcelにすべて入力しているので、それを使って検索をする。本研究費で購入した愛如生数字叢書のデータベース「佚書合編」や、公開されている台湾中央研究院の出土文献の字句データベース等を使用して、類似した語句・文が他に存在しないかどうかを詳細に検索する。文字数が篇によって大きく異なるため、一回につき一篇~四篇の検討を行う。『学林』で既に発表した訳注については組版ソフトAdobe InDesignで作成したデータがあるため、それに修正を加える形で編集する。組版・編集・校正作業も三名が中心となっていく。『論政論兵之類』は全五十篇で、2018年度中に第四十二篇までの訳注を発表し、2019年度には五十篇すべての訳注が終了した。終了した篇については、訳注発表以降に発表された学術論文や出土文献に関する資料を収集し、それらの結果を反映させ、修正を加える作業を行った。そして修正を加えた「論政論兵之類」部分の訳注を整理し、書籍にまとめて出版した。

## 4. 研究成果

(1) 訳注の成果については、2019年度に、第四十三篇から第五十篇までの訳注を『学林』第68号(2019年5月)および第69号(2019年11月)に掲載した。これで「論政論兵之類」五十篇の訳注をすべて終え、それまでに発表した訳注を整理して出版する作業を2020年度に行った。整理においては、五十篇全体を見直し、『学林』に掲載後に合評会で指摘された点や、その後新たに発表された出土資料や研究などを調査し、大幅に修正して管見の限りの国内外の先行研究

を引用し、注釈を加えた。さらに、書籍としてまとめるにあたって、訳注とともに、「論政論兵之類」五十篇の概要・特徴について述べた「銀雀山漢簡「論政論兵之類」諸篇の関係について」（石井真美子、『学林』第60号、2015年3月）を修正加筆し、「解題」として加えた。また思想研究として、「銀雀山漢簡「将義」に見る将の要件」（石井、『立命館文学』第664号、2019年12月）に修正加筆したものを収録し、固有名詞および語句の索引を附けた。まとめた書籍は『銀雀山漢墓竹簡〔貳〕論政論兵之類訳注』と題して、2021年1月に朋友書店から刊行した（索引を含め全342頁）。出土文献のまとまった訳注書は国内ではまだ少なく、近年陸続として出土する新たな資料の研究に寄与できるものとなった。2021年度にはひきつづき「陰陽時令・占候之類」の第一篇から三篇までの訳注を『学林』第72号（2021年6月）に、第四篇の訳注を『学林』第73号（2021年12月）に掲載した。

(2) 銀雀山漢墓竹簡に見られる思想の研究については、(1)にあげた「銀雀山漢簡「将義」に見る将の要件」を発表した。これは〔貳〕の「論政論兵之類」第十九篇である「将義」と題された篇に見られる、中国戦国時代の軍事思想についての論文である。この篇では、将軍とすべき人に求められる要件について、付帯して発生する要素や、その要素の軍事における重要度を身体の部分にたとえて列挙している。この論文では、その篇に挙げられている要件「義」「仁」「徳」「信」「智勝」「決」について、春秋末期から戦国時代頃の兵書および銀雀山漢簡諸篇の内容と比較検討した。その結果、思想の変化と社会背景の関係が窺えた。春秋末期から戦国時代にかけて、戦争の規模が大きくなり、将軍の内面的要素だけではなく、システムとしての倫理規範と統率制度が求められるようになり、かつ賞罰という目に見えるものが重要視されるようになった。これは人口が増加し社会情勢とともに価値観も変化したことが反映されている。これは現代社会において、一部の人間内面の素養を頼りにするのではなく、大衆向けに、外的な制度・マニュアル・報酬といった「わかりやすさ」が求められるのと似ている。銀雀山漢墓竹簡には『孫子兵法』も含まれているが、比較することによって、『孫子兵法』がその中でも思想上早期に属するものだということが証明された。そのほか、「論政論兵之類」諸篇に通じる思想として、『孫子兵法』に見られる実戦に対し慎重な姿勢に加え、失敗を教訓とした語が多く見られる。「将敗（将の敗北を招く欠点）」、「将失（将が失敗する状況）」、「為国之過（国を治めるうえでの過ち）」など、篇題を見るだけでも、敗北をまねく将軍側の原因、国が滅亡する原因などを挙げて戒める内容が多い。これは春秋時代から戦国時代にかけて、多くの戦乱と諸国の滅亡の状況を見てきた経験を背景にしたものである。一方、天文占や陰陽五行の思想を取り入れた非合理的な軍事思想である「兵陰陽」が反映されている兵法としては、第十三篇「地典」などがあり、北京大学蔵西漢竹書など他の新出資料に類似の文がある。これらには、現代伝えられている兵陰陽の書と比較すると、実際の地形にもとづいた記述が含まれ、もともとは地形や気候にもとづいたものであったのが呪術的な側面が強くなっていった、その過程が窺えるものであることを明らかにした。

(3) 銀雀山漢墓竹簡の書籍の構成の研究については、取得期間中に対象としたのは「論政論兵之類」諸篇のみではあるが、複数の篇にわたって同じ、あるいは類似の語句が見られ、思想上も共通するところが多く、五十篇の多くは相互に関連するものであったことが窺えた。また、注において、『釈文』に収録された未分類の残簡のいくつかについて、各篇に属するものである可能性を指摘できた。第三十六篇「君臣問答」の中には、複数の章で相互に同じ語句が使用されていたり、似たような内容の問答が見られたりと、意図的に登場人物の異なる類似の問答を集めたものであろう。また、他の書の中に類似する文が見られるものもあり、古代の説話の伝播の様子の一端を明らかにした。

(4) 研究計画における予期せぬ事として、2020年度より新型コロナウイルス感染拡大により、当該研究においても制限を受けた。2020年度前半期は研究活動全般において停滞せざるを得ず、三名が集まったの検討会も困難な状況にあり、「論政論兵之類」諸篇の訳注の整理と同時並行して行う予定であった「陰陽時令・占候之類」の訳注に着手することができなかった。書籍出版後、2021年度になってから再開することができた。また、当初の計画では2021年度に関連の論文を中国の雑誌に発表する予定であったが、やはり新型コロナ禍の影響で大学授業の形態が変わり、その対応に追われて進めることができなかった。しかし、その分これまで発表した訳注の加筆修正に力を注ぎ、新たな見解や多くの資料を反映させたものにするすることができた。今後の展望としては、引き続き「陰陽時令・占候之類」（全12篇）「其他」（全13篇）諸篇の訳注を行い、その中に見られる思想および銀雀山漢簡全体について考察を加える。また、銀雀山漢墓竹簡の写真を撮り直し、整理しなおされた『銀雀山漢墓竹簡集成』の刊行が2022年によく開始され、2022年5月現在、第二冊（『孫〔月+賓〕兵法』）と第三冊（『尉繚子』）が刊行されている。全十冊で、今後順次刊行予定ということで、〔貳〕に収録された佚書が刊行された際には再検討を加える予定である。さらに、出土文献では通仮字（音が同じ字を字義も同じと見なして用いる）や後世の字書には見られない字が多く使用されており、音韻や字形の研究も進みつつある。訳注の中でもこれらについて考察したが、今後音韻・字形の方面の研究も進めていきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 石井真美子, 村田進, 山内貴	4. 巻 72
2. 論文標題 『銀雀山漢墓竹簡〔貳〕』訳注（十一）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 学林	6. 最初と最後の頁 135-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石井真美子, 村田進, 山内貴	4. 巻 73
2. 論文標題 『銀雀山漢墓竹簡〔貳〕』訳注（十二）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 学林	6. 最初と最後の頁 173-217
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石井真美子, 村田進, 山内貴	4. 巻 68
2. 論文標題 『銀雀山漢墓竹簡〔貳〕』訳注（九）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学林	6. 最初と最後の頁 172-202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石井真美子, 村田進, 山内貴	4. 巻 69
2. 論文標題 『銀雀山漢墓竹簡〔貳〕』訳注（十）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学林	6. 最初と最後の頁 110-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石井真美子	4. 巻 664
2. 論文標題 銀雀山漢簡「将義」篇に見る将の要件	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 36-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 石井真美子
2. 発表標題 銀雀山漢簡「将義」篇に見る将の要件
3. 学会等名 中国芸文研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 石井真美子、村田進、山内貴	4. 発行年 2021年
2. 出版社 朋友書店	5. 総ページ数 340
3. 書名 銀雀山漢墓竹簡〔貳〕論政論兵之類 譯注	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	村田 進  (MURATA Susumu)  (30532262)	立命館大学・文学部・授業担当講師   (34315)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	山内 貴  (YAMAUCHI Takashi)  (20838065)	立命館大学・文学部・非常勤講師    (34315)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関